

## マリー・アントワネットの遺言書

—— 妹に宛てた最後の手紙 ——

高瀬英彦

### 要旨

十数年前、セーヌ川沿いのコンシェルジュリー<sup>注1</sup>のマリー・アントワネットの独房で、「ギロチン」とマリー・アントワネットが処刑前に書いた妹宛の「手紙」を見た。「マリー・アントワネットの遺言書」といわれているものだ。涙でにじんだ文字が痛々しかった。フランス革命という歴史を実感しつつ、歴史の残酷さに胸が痛くなったことを思い出す。その後、「ギロチンと手紙」はどこかへ消えた。リアルすぎて、一般の目に触れぬよう資料館に移され、保存されたようだ。

今年、ラファイエット百貨店近くの「贖罪礼拝堂」<sup>注2</sup>を訪れた際、その手紙が、コピーされて残っていた。そのコピーが手に入ったので記録のため、ここに再録して保存しておきたい。

手紙を読むと歴史上の女王というより、残してゆく子供たちを気遣う母親そのものの姿だ。

歴史上の出来事、人物像については様々な観点から様々な見方がなされる。マリー・アントワネットについても同じで、彼女の生き方に同情もあれば非難もある。以下、本文では

1) マダム・エリザベットに宛てたマリー・アントワネットの最後の手紙

① 日本語訳 ② 直筆の手紙

2) マリー・アントワネットの誕生から結婚までの概略

3) 国家財政の逼迫

4) オーストリアへの亡命失敗と処刑の順で記録した。

### 1) マリー・アントワネットの遺言書 (マダム エリザベット へ 1793年)

① 和訳文 (高瀬訳)  部はアントワネットの涙跡

10月16日 午前4 $\frac{1}{2}$ 時

あなたに... 私の妹に最後の手紙を書いています。私は死刑の判決を下されたのですが、犯罪人にしか適応されない恥ずべき死刑ではなく—あなたの兄さんに会いに行くように—との判決なんです。兄さんと同じように私も無罪なのですから、彼が最後の瞬間に見せたと同じ毅然さを見せて死んでゆきたいと思っています。良心になんの咎めもない時、誰もがそうであるように、私も冷静に落ち着いています。

ただ、かわいそうな子供たちを残していくのがずいぶん残念です；あなたも知ってのとおり、私は彼ら子供のためにだけ生きてきたのですから；そして私の良き、優しい妹、あなたはすべてを

投げ打って私たちと過ごしてくれましたね。だけど、私はそんなあなたを□なんという状況に落としてしまうのでしょうか！裁判の口頭弁論の時、娘があなたに会えなくなっていることを知りました；どうしましょう！かわいそうな娘、とても彼女に手紙など書けないわ。書いても彼女は受け取らないと思うの。それに…手紙があなた方のところへ届くかどうかも分かりや知れないわ：だから今、二人のために私の祝福を受け取り二人に届けてください。いつか、彼らがもっと大きくなってあなた会えるようになったら、すっかりあなたの世話になる事だと思います。

私が絶えず二人に言い聞かせてきたこと、つまり、信条と義務を正確に履行することこそ人生の基本中の基本だということ、友愛と互いの信頼が自分たちを幸せにしてくれるのだということに二人とも思いを馳せてほしいの；娘には、ある年齢になれば弟をいつも助けてやらねばならないと気付いてほしいの、彼女の豊富な経験と友愛が弟のためになるのだと言い聞かせてほしいの。弟は弟のほうで、友愛でもって出来る限り姉さんのお手伝いをし、お返しをしてほしいわ；いずれにしても二人とも、どんな境遇にあってもしっかりと手を取り合っていないと本当に幸せになれないことに気付いてほしいの。私たちを見本にしてほしいわ。こんな不幸な時も、私たちの友愛がどれほど慰めになったか、それに、幸せなときに友と幸せを分かち合えたら二重に嬉しいの；自分の家族以外、これほどすばらしく貴重なものは無いわ。息子には、私が繰り返し言い聞かせた「私たちの死の復讐をしようとしてはならない」という父さんの最後の言葉を忘れないでほしいの。

とても心苦しいことを一つ、あなたに言うておかないといけないわ：息子がどれほどあなたに苦勞をかけたかわかっています、わたしの愛しい妹、彼を許してね；彼の歳のことを考えてやってね、子供は平気で好きな事、しかもわけのわからない事を言うものなのよ。いつか、あなたの二人への親切、あなたの優しさの値打ちがもっと良く感じられる日が来ることを望んでいます。最後に言うておかなければならない事がまだあるの。裁判が始まった頃からそれを書いておきたかったけれど書かせてもらえなかったうえに、裁判の進行がとても早かったので本当に時間がなかったの。

私は、ローマ教会のカトリック教徒として死んで逝きます。これは両親の宗教であり、私が育ってきた宗教であり、いつも公言してきた宗教です。でも、こんなものに精神的慰めなど少しも期待していないし、この宗教に司祭というものがいるのかどうかもわからない（私がいるこの牢獄へ司祭たちが一度でも入ってくればいることが分かるのですが...）。それで、私が生涯で犯したかもしれないあらゆる過ちについては、「神」に直接心から許しを得たいと思います。私の最後の願いと、慈悲と優しさで私の魂を受け入れてくださるように、いつもの願いを神が好意を持って、受け入れて下さればと思っています。私のすべての知人に、そしてとりわけ、あなたに、思いもよらず苦勞をかけてしまったかも知れないあなたにお詫びします。私は、私に対して悪をなしたすべての敵を許します。

さあ、叔母さんたち、兄弟姉妹たちにお別れのアディユを言う時がきました。

私には友達がいました：死に逝くわたしにとって、彼らと永遠にお別れするのかと思うと、また彼らが悲しむかと思うと、とても残念です。最後の時まで、私が彼らの事を思っていたと知って

ほしいのです。

アディユ、さようなら、善良で優しい妹。この手紙があなたに届きますように！ いつも私のことを思っていてください：あなたと私の可哀想な、愛しい子供たちを心から抱きしめます。

ア、ア、神様！永久に彼らと別れるなんて胸が引き裂かれそうだわ！ アディユ！ アディユ！もう精神の勤めだけに励みましょう。それ以外、私には活動する自由など無いのですから、たぶん司祭がやってくるでしょうが、司祭には一言も言わないし、全く知らない人として対応して抗議しますわ。

H — G — M —

L —

マリー・アントワネット

② 直筆の手紙（活字体に起こした手紙文は、参考のため、最後部に添えてある）

1 枚目に3箇所「黒いシミ」があるが、実際の手紙では、アントワネットの涙でインクが滲んでいる部分である。

*ce 15<sup>me</sup> 8<sup>bre</sup> à 4 h<sup>1/2</sup> du matin*  
C'est à vous, ma sœur, que j'écris par la dernière fois, je viens d'être condamné  
non pas à une mort honteuse, elle ne l'est que pour les criminels, mais à  
aller rejoindre votre frère; comme lui innocent, j'espère montrer la même  
fermeté que lui dans ces derniers moments, je suis en moi comme on l'est,  
quand la conscience ne reproche rien. J'ai un profond regret d'abandonner  
mes pauvres enfants; vous savez que je n'existe que pour eux, et  
vous, ma bonne et tendre sœur: vous qui avez par votre amitié tout  
sacrifié pour être avec nous, dans  quelle position je vous  
laisse! j'ai appris par le plaidoyer même du procès que ma fille étoit  
séparée de vous. hélas! la pauvre enfant, je n'ose pas lui écrire, elle  
ne recevrait pas ma lettre, je ne sais même pas si celle-ci vous parviendra,  
recevez pour eux deux ici, ma bénédiction. j'espère qu'un jour, lorsqu'ils  
seront plus grands, ils pourront se réunir avec vous, et jouir en  
entier de vos tendres soins. qu'ils pensent tous deux à ce que je  
n'ai cessé de leur inspirer; que les principes, et l'exécution  
exacte de ses devoirs sont la première base de la vie; que leur  
amitié et leur confiance mutuelle, en feront le bonheur; que ma fille  
sente qu'à l'âge qu'elle a, elle doit toujours aider son frère par les  
conseils que son expérience qu'elle aura de plus que lui et son amitié  
pourront lui inspirer; que mon fils à son tour, rende à sa sœur, tous  
les soins, les services, qu'elle pu inspirer; qu'ils sentent eux-mêmes  
deux que, dans quelque position où ils pourront se trouver, ils ne seront  
vraiment heureux que par leur union. qu'ils prennent exemple de  
nous, combien dans nos malheurs, notre amitié nous a donné de  
consolations, et dans le bonheur on jouit doublement quand on peut le  
partager avec un ami; et où en trouver de plus tendre, de plus  
que dans sa propre famille? que mon fils n'oublie jamais les derniers  
mots de son père que je lui ai dit expressément, qu'il ne cherche jamais  
à venger notre mort: j'ai à vous parler d'une chose bien pénible à mon  
cœur, je suis combien cet enfant, doit vous avoir fait de la peine, il  
pardonnez-lui, ma chère sœur; pensez à l'âge qu'il a, et combien il est facile

de faire dire à un enfant ce qu'on veut, et même ce qu'il ne comprend pas, un jour viendra, j'espère, où il ne sentira que mieux tout le prix de vos bontés et de votre tendresse pour tous deux. il me reste à vous confier, encore mes dernières pensées. j'aurais les écrire dès le commencement du procès; mais, outre qu'on ne me l'ai point pas écrivre, la marche en a été si rapide, que je n'en aurais réellement pas eu le temps.  
je meurs dans la religion catholique, apostolique et romaine, dans celle de mes pères, dans celle où j'ai été élevée, et que j'ai toujours eue, n'ayant aucune consolation spirituelle à attendre, ne sachant pas si elle existe encore ici des prêtres de cette religion, et même le lieu où je suis les exposerai trop, si ils y entroient une fois. je demande sincèrement pardon à dieu de toutes les fautes que j'ai pu commettre depuis que j'existe. j'espère que dans sa bonté il voudra bien recevoir mes dernières vœux, ainsi que ceux que je fais depuis longtemps pour qu'il veuille bien recevoir mon âme dans sa miséricorde. <sup>et sa bonté</sup> je demande pardon à tout ceux que je connais, et à vous, ma bonne, en particulier, de toutes les peines que, sans le vouloir, j'aurais pu vous causer; je pardonne à tous mes ennemis le mal qu'ils m'ont fait. je dis ici adieu à mes tantes et à tous mes frères et sœurs. j'avois des amis, l'idée d'en être séparés pour jamais et leur peines sont un des plus grands regrets que j'emporte en mourant, qu'ils sachent, du moins, que jusqu'à mon dernier moment, j'ai pensé à eux. adieu, ma bonne et tendre sœur; puisse cette lettre vous arriver; pensez toujours à moi; je vous embrasse de tout mon cœur; ainsi que ces pauvres et chers enfants; mon dieu! qu'il est déchirant de les quitter pour toujours. adieu, adieu! je ne vais plus m'occuper que de mes devoirs spirituels.

comme je ne suis pas libre dans mes actions, ou même à peut-être, un prêtre, mais je proteste ici que je ne lui devrai pas un mot, et que je le traiterai comme un être absolument étranger.

H. G. Souquier  
Lyon  
Marie  
Le Coining

Marie Antoinette

## 2) マリー・アントワネットの誕生から結婚まで

1755年11月2日、ドイツ皇帝フランツ1世とオーストリア女帝マリア・テレジアの末娘（16番目11女）として、ウィーンのシェンブルン宮に生まれた。

マリア・アントニア（マリーアントワネットはフランス名）は愛くるしく優雅でスタイルもいいのだが、ほとんど躰けなどされていなかったために、13歳になるというのに母国語のドイツ語の文法は誤りだらけで、歴史や社会常識もほとんどわきまえていなかったといわれている。家庭教師としてフランスから呼ばれた、オルレアン司教・ヴェルモン神父は「大体において正確な判断は下すことができますが、ひとつの問題にじっくり取り組ませようとしてもそれが出来ないのです…… 出来ない子ではないのですが…」

政略結婚盛んな折、1770年4月、14歳でルイに嫁ぎ、ルイが1774年に国王ルイ16世になるとマリーアントワネットはフランス王妃となった。その後9年間で4人の子供に恵まれた。

マリーテレーズーシャルロット（1778～1851）－処刑後残された娘－手紙で言及されている  
ルイジョセフークサビエ（1781～1789）  
ルイシャルル（1785～1795）－処刑後残された息子－手紙で言及されている  
ソフィーエレーヌーベアトリクス（1786～1787）

## 3) 国家財政の逼迫

ルイ14世（太陽王）の晩年、ポーランド継承戦争、オーストリア継承戦争、7年戦争などでフランス国家財政は窮地に陥っていた。その後、跡継ぎのルイ16世は財政改革を図ろうとしたが思い通り行かない。そんな折、「首飾り事件」（1785）が起こった。ラ・モット伯爵夫人と名乗る女性が、高額なダイヤの首輪をマリー・アントワネットに売ったという噂。日常の苦境に耐えていた民衆はこの噂に怒りをあらわにする。

## 4) オーストリアへの亡命失敗と処刑

民衆の怒りは、1789年7月14日バスチーユ牢獄襲撃（現在のパリ祭＝革命記念日）となった。襲撃は政治犯を解放するという大義名分のもとに行われたけれど、実際には政治犯はいなかったらしい。民衆の怒りそのものだったようだ。その後8月26日国民議会による有名な「人権宣言」が公布された。

事態の深刻さに気づいた国王夫妻は、1791年6月20日、亡命を企て、ひそかにパリを抜け出すが、翌日、ヴァレヌで発見され拘束された。1792年9月21日共和制宣言、1793年1月20日ルイ16世死刑執行。1793年8月1日、マリー・アントワネットはコンシエルジュリーに移され、「革命裁判所」にかけられることになった。

罪状はつぎの3点「国家財産を浪費した罪」「敵と内通して情報を漏洩した罪」「国家の内外にお

ける安全に対し、陰謀を企てた罪」により死刑。

1793年10月16日、午前4時30分、紙、インク、ペンを頼んで、マダム・エリザベットに最後の手紙を書いた。これがいわゆる「マリー・アントワネットの遺言状」といわれるものだ。

同日10月16日午前11時女王は、馬車で革命広場（現在のコンコルド広場）につれてゆかれて、12時15分にギロチンにかけられる。（普通、処刑はうつ伏せで行われるが、マリー・アントワネットは上向に寝かされて処刑されたという） 国王夫妻は処刑後、21年間、パリ市内の霊廟<sup>注2</sup>に安置され、今はパリ郊外のサン・ドゥニ教会<sup>注3</sup>に歴代の国王とともに葬られている。ルイ16世とマリー・アントワネットは、時勢が読めず、政治的に無力であったことで裁かれたのだろうが、アントワネットの母としての思いに胸が痛む。

注1 コンシェルジュリー：

14世紀後半までシテ王宮の一部。シャルル5世がこの王宮からサン・ポール館に移る時、ここに王室司令部を置きコンシェルジュ（門衛）が任命され、門衛（コンシェルジュ）の住居はコンシェルジュリーと呼ばれることになった。1793年国民公会により設置された革命法廷はコンシェルジュリーに2年間に2700名の死刑判決を受けた受刑者を送り込み、彼らはここで処刑をまつことになる。コンシェルジュリー牢獄の歴史が始まる。マリー・アントワネットもそのひとりだった。

1914年コンシェルジュリー刑務所は廃止され、現在は一般に公開されている。

#### コンシェルジュリーの独房のマリーアントワネット

黒いヴェールをまとい机に向かっているアントワネット。右にベッド、左に衝立越しに監視する衛兵の姿が見える。（衛兵は常時二人）



注2 ルイ16世とマリー・アントワネットの「贖罪礼拝堂」

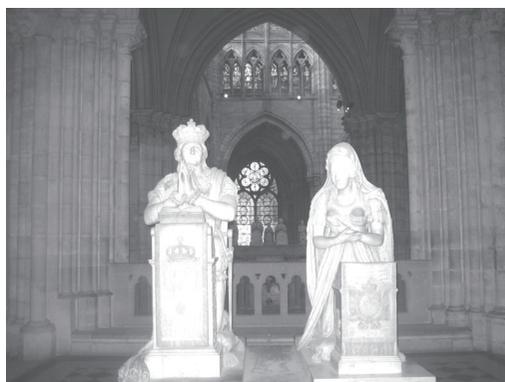
処刑後21年間安置されていた礼拝堂

霊廟外観（左）と地下礼拝堂（右）



注3 サン・ドゥニ教会：アテネの人、聖ドゥニは3世紀半ばパリに伝道に来て捕らえられ、モンマルトルの丘で斬首。聖人は自分の首を持って北に歩くこと4キロ、ついに倒れたので、その場に墓が立ち、やがて礼拝堂が出来たという伝説のある教会・・・自分の首を胸に抱いた聖ドゥニの姿はサン・ドゥニ教会の北面のレリーフで見ることが出来る。

暦代王家の墓所であるサン・ドゥニ教会（左）とふたりの像（右）



サン・ドゥニ像

### 参考文献

- E.Lever: Marie-Antoinette, Fayard
- Mlle Celliez: Les Reines de France, Ducrocq
- A.Conte: Sire, ils ont voté la mort, Rober Laffont
- P.de Nolhac: Marie-Antoinette à Versailles, Flammarion
- G.Lentre: Marie-Antoinette, Perrin

Le 16 octobre 4<sup>1</sup>/<sub>2</sub>h. du matin

C'est à vous, ma soeur, que j'écis pour la dernière fois. Je viens d'être comdamnée, non pas à une mort honteuse, elle ne l'est que pour les criminels, mais à aller rejoindre votre frère ; comme lui ; innocente, j'espère montrer la même fermeté que lui dans ces derniers moments, je suis calme comme on l'est quand la conscience ne reproche rien. J'ai un profond regret d'abandonner mes pauvres enfants. Vous savez que je n'existais que pour eux et vous, ma bonne et tendre soeur ; vous qui avez par votre amitié, tout sacrifié pour être avec nous, dans  quelle position je vous laisse !

J'ai appris, par le plaidoyer même du procès, que ma fille était séparée de vous. Hélas ! La pauvre enfant ! Je n'ose pas lui écrire, elle ne recevrait pas ma lettre, je ne sais pas même si celle-ci vous parviendra.

Recevez pour eux deux ici ma bénédiction. J'espère qu'un jour lorsqu'ils seront plus grands, ils pourront se réunir avec vous, et jouir en entier de vos tendresse soins. Qu'ils pensent tous deux à ce que je n'ai cessé de leur inspirer, que les principes et l'exécution exacte de ces devoirs sont la première base de la vie, que leur amitié et leur confiance mutuelle en fera leur bonheur.

Que ma fille sente qu'à l'âge qu'elle a, elle doit toujours aider son frère par les conseils que son expérience qu'elle aura de plus que lui et son amitié pourront lui inspirer.

Que mon fils à son tour, rende à sa soeur tous les soins, les services que l'amitié peut inspirer : qu'ils sentent enfin tous deux que dans quelque position qu'ils puissent se trouver ; ils ne seront vraiment heureux que par leur union.

Qu'ils prennent exemple de nous ! combien dans nos malheur notre amitié nous a donné de consolation ! et dans le bonheur on jouit doublement quand on peut le partager avec un ami, et où en trouver de plus tendres et  de plus chers que dans sa propre famille.

Que mon fils n'oublie jamais les derniers mots de son père que je lui  répète expressément : qu'il ne cherche jamais à venger notre mort.

J'ai à vous parler d'une chose bien pénible à mon coeur. Je sais combien cet enfant doit vous avoir fait de la peine ; pardonnez-lui, ma chère soeur ; pensez à l'âge qu'il a, et combien il est facile de faire dire à un enfant ce qu'on veut, et même ce qu'il ne comprend pas.

Un jour viendra, j'espère, où il ne sentira que mieux tout le prix de vos bontés et de votre tendresse pour tous deux.

Il me reste à vous confier encore mes dernières pensées. J'aurais voulu les écrire dès le commencement du procès, mais outre que l'on ne me laissait pas écrire, la marche en a été si rapide que je n'en aurais réellement pas eu le temps.

Je meurs dans la religion catholique, apostolique et romaine, dans celle de mes pères, dans celle où

j'ai été élevée et que j'ai toujours professée ; n'ayant aucune consolation spirituelle à attendre ne sachant pas s'il existe encore ici des prêtres de cette religion, et même le lieu où je suis les exposerait trop s'ils y entraient une fois.

Je demande sincèrement pardon à Dieu de toutes les fautes que j'ai pu commettre que j'existe.

J'espère que dans sa bonté, il voudra bien recevoir mes derniers vœux, ainsi que ceux que je fais depuis longtemps pour qu'il veuille bien recevoir mon âme dans sa miséricorde et sa bonté.

Je demande pardon à tous ceux que je connais, et à vous ma soeur en particulier, de toutes les peines que, sans le vouloir ; j'aurais pu vous causer ; je pardonne à tous mes ennemis le mal qu'ils m'ont fait. Je doit ici dire adieu à mes tantes et à tous les frères et soeurs. J'avais des amis, l'idée d'en être séparée pour jamais, et leurs peines sont un des plus grands regrets que j'emporte en mourant. Qu'ils sachent du moins que jusqu'à mon dernier moment j'ai pensé à eux.

Adieu ! ma bonne et tendre soeur ! Puisse cette lettre vous arriver !

Pensez toujours à moi. Je vous embrasse de tout mon coeur ainsi que mes pauvres et chers enfants. Mon Dieu ! Qu'il est déchirant de les quitter pour toujours !

Adieu ! adieu ! Je ne vais plus m'occuper que de mes devoirs spirituels. Comme je ne suis pas libre dans mes actions, on m'amènera peut-être un prêtre, mais je proteste ici que je ne lui dirai pas un mot, et que je le traiterai comme un étranger.